

ワロゴ語（豪州）の復活運動

角田太作

2014年6月28日（土）

2014（平成26）年度海外学術調査フォーラム、東京外国語大学 AA 研

0. はじめに

以下の述べることの大部分は自慢話である。ご容赦いただきたい。

1. Monash University（メルボルン）大学院

1971年3月に Monash University（メルボルン）の大学院の言語学科に入学した。

1. 1. 修士課程

1971年から1974年にかけて、3回、豪州東北部で Biri, Warrongo, Gojal, Gabilgaba, Bologoyban などの言語を調査した。これらの言語は全て、消滅寸前だった。

調査の中心は Warrongo（ワロゴ）語である。Townsville 市の西北、Cairns 市の西南の言語である。調査は合計約8ヶ月、行った。

Warrongo 語のデータは主に最後の話者、故 Alf Palmer さんから得た。この地域の言語は、当時既に全て消滅寸前だったが、Alf Palmer さんは例外的に詳しい言語知識を持っていた。

しかし、残念ながら、私は勉強不足で、無知だった。フィールドワークの経験も無かった。英語はもろくにしゃべれなかった。しかも、調査できる話者はたった一人しかいない。辛かった。

1. 2. 博士課程

豪州西北部の Djaru（ジャル）語を1975年と1976年に調査した。話者の数は、当時、200人から250人くらいであったと思う。

2. 調査の成果

上記の調査の成果としては、以下のものなどがある。

2. 1. Warrongo 語

2. 1. 1. 修士論文など

修士論文は T. Tsunoda (1974)である。2003年に、Warrongo 語の reference grammar (仮に「記述文法」と訳す)を新たに書き始めて、2011年に T. Tsunoda (2011c)として出版した。この他、T. Tsunoda (2003)もある。簡単な辞書である。その他に、論文を多数書いた。

2. 1. 2. T. Tsunoda (2011c)の内容

T. Tsunoda (2011c)の内容は、下記の通りである。

Chapter 1 The language and its speakers pp. 1-52.

(周辺の言語、地域の歴史、文化的・社会的背景 (親族名称、神話、名付けなど)、先行研究など)

Chapter 2 Phonology pp. 53-155.

Chapter 3 Word classes and morphology pp. 156-317.

Chapter 4 Syntax pp. 318-699.

Texts pp. 700-722.

References pp. 723-735.

Index of subjects pp. 736-745.

Index of languages pp. 746-747.

Index of names pp. 748-751.

かなり詳しい記述を残せたと思う。最後の話者一人でも、しかも、わずか約8ヶ月の調査でも、これだけ詳しく記録できた。これはひとえに Alf Palmer さんが良いデータを提供してくださったおかげである。

2. 2. Djaru 語

博士論文は T. Tsunoda (1978)である。少し書き直して、T. Tsunoda (1981a)として出版した。その他に、論文を多数書いた。

3. Warrongo 語の特異性

Syntactic ergativity「統語的能格性」と呼ぶ現象がある。複文の作り方の一つである。これは世界でも稀な現象である。従って、いわば宝石のようなものである。主に豪州の九つの言語にしか見つかっていない。特に、Warrongo, Warrgamay,

Jirrbal, Girramay, Mamu, Ngajan, Yidiny の、豪州東北部の七つの言語に集中している。従って、この地域はいわば宝庫のようなものである。

4. Warrongo 語の復活運動

4. 1. 経緯

1981年に、Warrongo 語の最後の話者、Alf Palmer さんが亡くなった。

1998年に、現地で言語復活運動の計画が始まりました。協力して欲しいという依頼が現地から私に来了。

2000年3月と2001年3月に、Townsville 市に行き、予備的な打ち合わせを行った。Warrongo 語復活運動の中心人物は Rachel Cummins さんである。Warrongo 語の最後の話者、Alf Palmer さんの孫娘（正確には娘の娘）である。

打ち合わせの際に以下のことを話した。

「Warrongo 語には、言語学者が syntactic ergativity と呼ぶ現象があります。これは世界でも稀な現象です。従って、いわば宝石のようなものです。特に、Warrongo 語など、豪州東北部のこの地域の七つの言語に集中しています。従って、この地域はいわば宝庫のようなものです。統語的能格性は、この地域の人たちにとってだけでなく、人類全体にとって、貴重な文化財です」。

このように話したら、「何だろう。知りたい。」と大変、興味を示した。

2002年3月に、Townsville 市で Warrongo 語のレッスンを開始した。その後、2002年8月、2004年3月、2006年3月、8月にも、Warrongo 語のレッスンを行った。合計で5回である。1回につき4日か5日、レッスンを行った。出席者は Rachel Cummins さん、娘さんの内の二人、その他の Warrongo の人たちである。

今までに、下記を（あるいは、その一部を）教えた。

発音、基礎語彙、活用（名詞、代名詞、動詞）、単文（自動詞文、他動詞文、平叙文、疑問文、命令文）、複文（統語的能格性）、ミニ会話、親族体系、神話、名付け。

角田三枝博士が、日本語教育の経験を生かして、レッスンの行い方、教材の準備など、様々な面で協力してくださっている。例えば、レッスン用のカードを作ってくださった。名詞の勉強のための、山の絵、家の絵、蛇の絵、川の絵など、動詞の勉強のための、人が歩いている絵、人が泳いでいる絵、何かを運んでいる絵、何かを食べている絵など、名詞の格接尾辞の勉強のためのカード

などを作ってください。このカードをレッスンで使ってみたら、受講者、特に、子供さんたちに、大変好評であった。このカードは、コピーを科研の報告書 T. Tsunoda and M. Tsunoda (2007)に載せてある。

豪州のシドニーに The Australian Literacy & Numeracy Foundation という慈善団体がある。この団体の協力を得て、2011年9月と2014年3月に現地に行き、子供用の Warrongo 語教材の作成に参加した。

4. 2. 成果

上記のように、2002年から今までにレッスンを5回行ったが、Warrongo 語を話せるようになった人はまだいない。これはやむを得ないことであろう。レッスンとレッスンの間隔が長くて、長い時には、2年間もレッスンが無かったのだから。しかしながら、少しではあるが成果が挙げられている。以下のような成果がある。

(あ) 2002年3月の1回目のレッスンの時のことである。或る日、名詞 gamo 「水」と動詞「飲む」の命令形 bija 「飲め」を教えたら、Rachel Cummins さんが以下のように言った。

(1) *Bija gamo.*

「水を飲め！」

この文は Warrongo 語の文として正しい文である。Warrongo 人が Warrongo 語の文を言うのを聞くのは、1974年に故 Alf Palmer さん (Rachel Cummins さんの母の父) の Warrongo 語を聞いて以来、なんと28年ぶりのことであった。

(い) 2002年のことだったと思う。或る日、レッスンで統語的能格性を教えた。練習問題も行ってみたら、よくできた。レッスンの後、Rachel Cummins さんのお宅に行くと、Rachel Cummins さんのご主人がいたので、以下のように話した。

「Warrongo 語に、統語的能格性という貴重な宝石のような現象があると、以前、お話ししましたね。今日は、統語的能格性を勉強しました。お宅のお嬢さんたちは、大変よくできました。もうお宅のお嬢さんたちの頭の中には宝石が入っています。」

これを聞いて、父親は大変喜び、また、涙ぐんでいた。自分たちの文化に誇りを持ったのだと思う。

(う) 2006年のことであったと思う。以下の文を教えた。

(2) *Boji bandan.*

「おならが出た。」

また、既に、疑問代名詞 *wanyo* 「誰」も教えてあった。或る日、小さい子がおならをした。それを聞いてすかさず、或る人が以下のように言った。

(3) *Wanyo boji bandan?*

「誰がおならが出たの？」

自分で新しい文を作ったのである。この文も、*Warrongo* 語の文として正しい文であると思う。

(え) これも2006年のことであつたと思う。或るお母さんから、息子に *Warrongo* 語の名前を付けて欲しいと頼まれた。T. Tsunoda (2003)の辞書を一緒にみて、名前を決めた。その息子さんは大変喜んだ。それを見て、別の男の子が言った。「僕もワロゴ語の名前が欲しい。」*Warrongo* 語の名前が欲しいということは、自分たち文化に関心を持ったからであろう。

ワロゴ語復活運動について、日本と豪州で多数の報道があつた。一つだけあげる。以下の *Japan Times* の記事である。

<http://www.japantimes.co.jp/life/2010/01/17/general/tokyo-prof-strives-to-rescue-an-aboriginal-language-from-oblivion/#.U596Bb8jWDU>

5. 何故、祖先の言語を学ぶ？言語の価値

今、世界各地で言語再活性化運動が進んでいる。何故、祖先の言語を学ぶのか？何故、祖先の言語は大事何か？その目的は、多くの場合、物質的なことではなく、精神的なことである。例えば、Alf Palmer さんの孫娘 Rachel Cummins さんの答えは下記である。Language is important for identity 「言語はアイデンティティーのために重要である」。また、以下のように考える人もいる。言語は文化の中心的な部分である。だから、言語が消えたら、その文化の中心的部分が消えてしまう。だから言語は重要である。

6. 何のための学問か？研究者の役割と倫理

私は1971年に *Warrongo* 語の調査を始めた時には、ただデータをもらって、修士論文を書いて、修士号をもらえばよいと思っていた。しかし、Alf Palmer さんは、常々私にこう言った。I'm the last one to speak *Warrongo*. When I die, this language will die. I teach you everything I know, so put it down properly. 「ワロゴ語を話せるのは私が最後だ。私が死んだら、この言語も死んでしまう。私が知って

いることは全て教える。だからきちんと書いてくれよ。」

今にして思うと、Alf Palmer さんは以下のことを言おうとしたのであろう。「何のために学問をするのか？私の言語を調べて、成果を挙げて、立身出世する。それだけで良いのか？データの泥棒でよいのか？」今にして思えば、Alf Palmer さんは言語の価値、消滅危機言語を記録することの大事さ、ひいては研究者の倫理と役割を教えてくれたのである。

今、世界各地で少数言語が消滅しかけている。消滅した言語も多数ある。(a) 消滅危機言語を記録することと、(b) 言語再活性化運動に協力することは、言語学者の最も緊急な任務であると思う。この記述と協力を通して、言語学は人類文化に大きく貢献することができる。

2001年3月に Townsville 市で、Stephen Walsh さんと言う方にお会いした。この方は Biri 語グループの人である。この方も、Rachel Cummins さんと同じく、私が1971年から1974年にかけて調査した方々の孫の世代である。私にこう言ってくださった。We are grateful that you recorded our languages. 「私達の言語を記録してくれてありがとう。」調査は本当に辛かったが、30年後にこう言っていて、苦労した甲斐があったと思った。

言語学者は多数いる。しかし、少数言語や消滅危機言語を研究する言語学者は少数派である。かなり多くの言語学者は日本語や英語など、大言語を研究している。

7. 私の今後の希望

今後、Warrongo 語について、できることなら以下のことを行いたいと思っている。

- (a) もっと Warrongo 語のレッスンをを行うこと。
- (b) 辞書、教科書など、Warrongo 語の教材を作ること。

(c) James Cook University (Townsville 市)で Warrongo 語を教える。豪州では豪州原住民語の社会的地位は低い。しかし、大学で教えれば、「大学で、ドイツ語、フランス語、日本語、中国語を教えている。今度は Warrongo 語も教えている。Warrongo 語は、ドイツ語、フランス語、日本語、中国語のように、立派な言語なのだ。」と思う人が出てくるかもしれない。そうなれば、豪州原住民語の社会的地位の向上に役立つであろう。

8. 課題、問題点

消滅危機言語の記録と言語再活性化運動への協力に関して、課題と問題点がある。

8. 1. 全体像の記述

ある言語を調査する時に、できる限り全体像を記録することが重要である。具体的には下記の三点セットを書くことである。

- (a) Reference grammar (仮に「記述文法」と訳す)：音韻、形態、統語。
- (b) Texts (物語などを文字化して、グロス、訳、注などを付けたもの)。
- (c) 語彙。

(この三点セットを書くことは米国の人類学者・言語学者 Franz Boas が提唱したものだそうだ。The Boasian tradition 「ボアズの伝統」と呼ぶ人がいる。)

ある言語を調査する時に、言語だけでなく、文化的・社会的背景についても、調査することが大切である。(このことも Boas は実践したそうだ。) 例えば、親族体系、行動の規範などである。待遇表現(敬語など)に反映している。神話も大切である。名付けに反映することがある。

日本人の言語学者の書いた reference grammar は非常に少ない。これは日本の言語学の弱点であると思う。日本の方言の研究も同様である。一つの方言の全体像を記述しようとしないうだ。前の職場の国立国語研究所の或る同僚が「ある方言のアクセントを調べたら、次は別の方言のアクセントを調べる」と、当然のように言った。全体像を記録するという気持ちは始めから無い。自分の興味ある部分だけを調査する。いわば、つまみ食いの言語調査である。これはよくない。つまみ食いの言語調査では、後の人がその言語・方言の他の面を知ろうとしても、知ることができない。つまみ食いのデータでは言語再活性化運動も困難である。

T. Tsunoda (2011c) のデータは、約8ヶ月の調査で、大部分は最後の話者1人から得たものであることを考えると、かなり詳しい記述になったと思う。ひとえに最後の話者 Alf Palmer さんがよいデータを提供してくださったおかげである。このことはまた、話者が一人でもこれだけの記述ができる場合があることを示している。

以上のことを考慮して、AA 研に以下のことを期待する。

- (a) 三点セットを書く研修コースを開催すること。

(b) 三点セットを刊行すること。特に reference grammars である。Reference grammar が少ないことは日本の言語学の弱点であるので。

AA 研のような組織だからこそ、是非、実現していただきたい。また、この二つを実現したら、AA 研の評価は一層、高まるであろう。

8. 2. 言語学の教育

言語学の教育では、言語学の様々な分野を満遍なく教育すること、即ち、オールラウンドな教育をすることが重要である。米国の或る大学で言語学を学んだ或る日本人言語学者が、日本の大学における言語学の教育はこの点で欠けていると、繰り返し言っていた。

また、三点セットの重要さも教えなければならない。残念ながら、私は三点セットの重要さは、日本では学ばなかった。豪州で学んだ。

更に、知識を教えるだけでなく、研究者の倫理を教えることも重要である。

8. 3. 助成金：財政難

私は、2006年以降、Warrongo 語の復活運動に行くために、科研費、豪日交流基金（豪州政府が設立した財団）の助成金、東京大学の助成金（当時、東京大学に勤務していた）を申請したが、全て失敗した。科研費に「消滅危機言語、言語再活性化運動」という枠があってしかるべきだと思う。消滅危機言語の記録と言語再活性化運動への協力は言語学者の最も緊急な任務であると思う。

8. 4. 評価と人事

日本の言語学の社会では、少なくとも、一部では、国際的に有名なジャーナルに載った論文を最も高く評価する傾向がある。

（実は私も国際的に有名なジャーナルに論文を載せたことがある。T. Tsunoda (1981b, 1985)と Tsunoda, Ueda & Itoh (1995)である。また、国際的に有名なジャーナルの Board of Consulting Editors に入っていたこともある。 *Linguistics* (Berlin & New York: Mouton de Gruyter)と *Studies in Language* (Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins)である。何故、こんなことを申し上げるかということ、「角田さんは国際的に有名なジャーナルに論文を載せたことが無いから、負け惜しみでこんなことを言うのでしょ」という誤解が起こる恐れがあるからである。負け惜しみではないことを示すために、このことを申し上げた。）

確かに、国際的に有名なジャーナルに載った論文の中には、素晴らしいものもある。しかし、たいした論文とは思えないものもある。その時の流行のテーマを追った論文で、後から振り返ると、あまり価値が無いと思う論文がある。その時の流行のテーマを追った論文はジャーナルに載りやすい。一方、消滅危機言語を地道に記録した研究はあまり高く評価されない。このような評価基準が人事にも反映することがある。このような研究評価基準と人事基準はよくない。研究評価基準と人事基準を再考すべきだと思う。記録を残すこと、特に、良い記録を残すことを高く評価すべきである。

1年間に書いた論文の数で評価する傾向もある。嘆かわしいことである。

そもそも何のために学問をするのかを、考えるべきである。

9. まとめ

小稿のテーマは、ワロゴ語（豪州）の復活運動である。主に、私が個人的に行ってきたことを記した。しかし、消滅危機言語の記録と言語再活性化運動については、言語学者の個人的な努力では解決できない問題が多数ある。

私は、消滅危機言語の記録と言語再活性化運動への協力は言語学者の最も緊急な任務であると思うと思う。このことを言語学者全体で認識していただきたい。この研究と活動に、もっと多くの言語学者が参加することを期待する。

更に、言語学の教育、助成金、評価と人事について、大学など組織が再考すべきことが沢山ある。

まず、そもそも何のために学問をするのかという根本的な問題を考えるべきである。

注： 上で述べたことは、8. 3と8. 4と9を除いて、下記に基づいている。

T. Tsunoda (2004, 2005, 2011c)、角田太作(2011a, 2011b), T. Tsunoda and M. Tsunoda (2007, 2010)、私が日本語文法学会第11回大会（2010年11月6日（土）、就実大学）で行った講演「人類文化からみた日本語の記述文法の未来」。

参考文献

Tsunoda, Tasaku. 1974. *A grammar of the Warungu language, North Queensland*. MA thesis. Melbourne: Monash University.

Tsunoda, Tasaku. 1978. *The Djaru language of Kimberley, Western Australia*. PhD thesis. Melbourne: Monash University.

- Tsunoda, Tasaku. 1981a. *The Djaru language of Kimberley, Western Australia*.
Canberra: Pacific Linguistics, Australian National University.
- Tsunoda, Tasaku. 1981b. Split case-marking patterns in verb-types and tense/aspect/
mood. *Linguistics* 19: 389-438.
- Tsunoda, Tasaku. 1985. Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics* 21: 385-396.
- Tsunoda, Tasaku, Sumie Ueda & Yoshiaki Itoh. 1995. Adpositions in word-order
typology. *Linguistics* 33: 741-761.
- Tsunoda, Tasaku. 2003. *A provisional Warrungu dictionary* (ICHEL Linguistic Studies
Vol. 8) 東京大学大学院人文社会系研究科.
- Tsunoda, Tasaku. 2004. Attempt at the revival of Warrungu (Australia): its cultural and
scientific significance. In Piet van Sterkenburg (ed.), *Linguistics today - Facing a
greater challenge*, 267-303. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Tsunoda, Tasaku. 2005. *Language endangerment and language revitalization*. Berlin &
New York: Mouton de Gruyter. (Hard cover)
- 角田太作. 2011a. 言語の記述、特に危機言語の記述. 『日本エドワード・サピア
協会研究年報』第 25 号: 1-10.
- 角田太作. 2011b. フィール言語学における「文法」の位置. 『日本語学』5: 4-15.
東京: 明治書院.
- Tsunoda, Tasaku. 2011c. *A grammar of Warrungu*. Berlin & New York: De Gruyter
Mouton.
- Tsunoda, Tasaku and Mie Tsunoda. 2007. Study of language change: Language death
and language revival - The case of the Warrungu language. 『東南アジア・豪州・
アフリカの少数民族言語の文法記述と言語変容の研究: 言語調査と理論言
語学・社会言語学の統合を目指して』(平成 17 年度~18 年度科学研究費補
助金基盤研究 (C)、課題番号 17520257) 35-110, plus pictures. 愛知教育大
学.
- Tsunoda, Tasaku and Mie Tsunoda. 2010. The revival movement of the Warrungu
language of northeast Australia. In Jelisava Dobovsek-Sethna, Frances Fister-Stoga
and Cary Duval (eds.), *Linguapax Asia: A retrospective edition of language and
human rights issues[:] Collected proceedings of Linguapax Asia Symposia
2004-2009*, 12-18. Tokyo: Linguapax Asia.